

竹取物語に見られる多文化

カレル大学准教授 Martin TIRALA

近年、多文化社会あるいは多文化主義という言葉をよく耳にする。多文化共生社会はグローバル化と同じくあまりにも現代的な現象だと思われるが、古代社会や昔の国にこそ様々な民族や文化は問題なしに共存していた。古代大和も同じようであったと簡単に推測できる。「物語の出で来はじめの祖」と称され、飛鳥と奈良時代を舞台にした『竹取物語』は割りと短い作品だが、その中に多文化の相違と共生がはっきり見えると思う。

この発表では『竹取物語』に見られる多文化の諸問題について述べたい。『竹取物語』には両立しがたいイデオロギーが上手に絡み合わせられている。ちなみに、現世の煩惱と執着そして道教的な幻想は仏教的な観念で批判されている。その上、同時に他界との出会いも不可欠な役割を果たしている。多文化共生、具体的には、月の都・インド・中国・日本の相対的な関係はこの物語の特徴だと思う。